

社会が変わり、子どもが変わり、いじめが変わったことを理解するために

馬居政幸

1. 社会が変わり、子どもが変わる

1) 社会が変わる→2005年人口減少社会に →図1参照

①子どもが減って、高齢者が増えて、働き手が減る社会の教育システムは未開発

- ・「超高齢社会（高齢化率 20%以上）」と「情報と経済のグローバル化」がセットになった時代と社会を生き抜く「人」と「人の間」を再構築する社会システム

③子どもとその生きる場の変化による「人の間形成システム」のひずみ→「いじめ」

2) 社会と子どもの何が変わったか→図2、図3参照

①出生率と出生数の変化：多産多死（団塊以前）→多産少子（団塊のみ）→少産少死

	合計特殊出生率	普通出生率（人口千人比）	出生数
・ 団塊の世代（1949）	4.32 人	34.3 人	270 万人
・ 少産世代（1960）	2.0 人	17.4 人	160 万人
・ 団塊ジュニア（1973）	2.14 人	18.8 人	209 万人
・ 少子世代（2005）	1.25 人	8.5 人	107 万人

②家族の構造の変化

- ・ 日本版近代家族（家族の 55 年体制）は少産世代から始まる
夫：サラリーマン、妻：専業主婦、子ども：二人、母親による学校中心の子育て
- ・ 少産世代と団塊ジュニアの家庭は皆婚と性別役割分業が基本
- ・ 団塊の世代が最後の古い日本人→自分が育つ過程に父母になる学習が組みこまれる
- ・ 少産世代の女性から、結婚が人生の選択肢の一つに
- ・ 団塊ジュニアから男女共に相手の人生をひきうけることに戸惑いを

③学校の役割の変化

- ・ 団塊の世代→多数派は分に応じた夢実現、社会的上昇のための競争は少数派
 - ・ 大学進学→男（20～25%）、女（10～15%：短大中心）
 - ・ 大学進学は少数者になるための競争→階層流動化（父より高い階層への移動）
- ・ 少産世代と団塊ジュニア→多数派が序列づけのための競争を行う場
 - ・ 少産世代 →男<女（短大）→序列付けのための競争（再階層化）
 - ・ 団塊ジュニア→男<女（短+4大）→少数者にならないための競争（階層固定化）
 - ・ 少子世代→落とされないための競争（全体）→男<女（4大）階層分化→分裂？

2. 子どもが変わり、いじめが変わる.

1) 団塊の世代

- ①戦前（少産少死、貧しい身分社会）の文化をもった親+どこの家にも4～5人
 - ・多種多様な人生を学ぶモデルが身近に存在→夢は一人になりたい
- ②兄弟姉妹、近所の仲間・年長・年少者のなかで生きる術を鍛えられる
 - ・性差と生誕順で人生のコースが条件づけられると信じさせられた最後の日本人
 - ・自分の家と隣の家を自由に行き来できた（された）最後の日本人
 - ・学校よりも学校の外でいけることが真の人生と教えられた最後の日本人
- ③生まれたときから「いじめ＝弱点克服学習」を強いられる
 - ・兄と姉からいじめの洗礼→弱者の悲哀の社会化→強者へと成長する動機付け
 - ・異年齢集団での遊びはいじめの温床→自分の弱点克服方法を学ぶ機会
 - ・学校の教室だけが人生ではない→学校の外でいじめの相手を探すこと可能
 - ・兄弟姉妹+多種多様な友人→理不尽ないじめから守ってくれる人と力に

2) 少産世代+団塊ジュニア

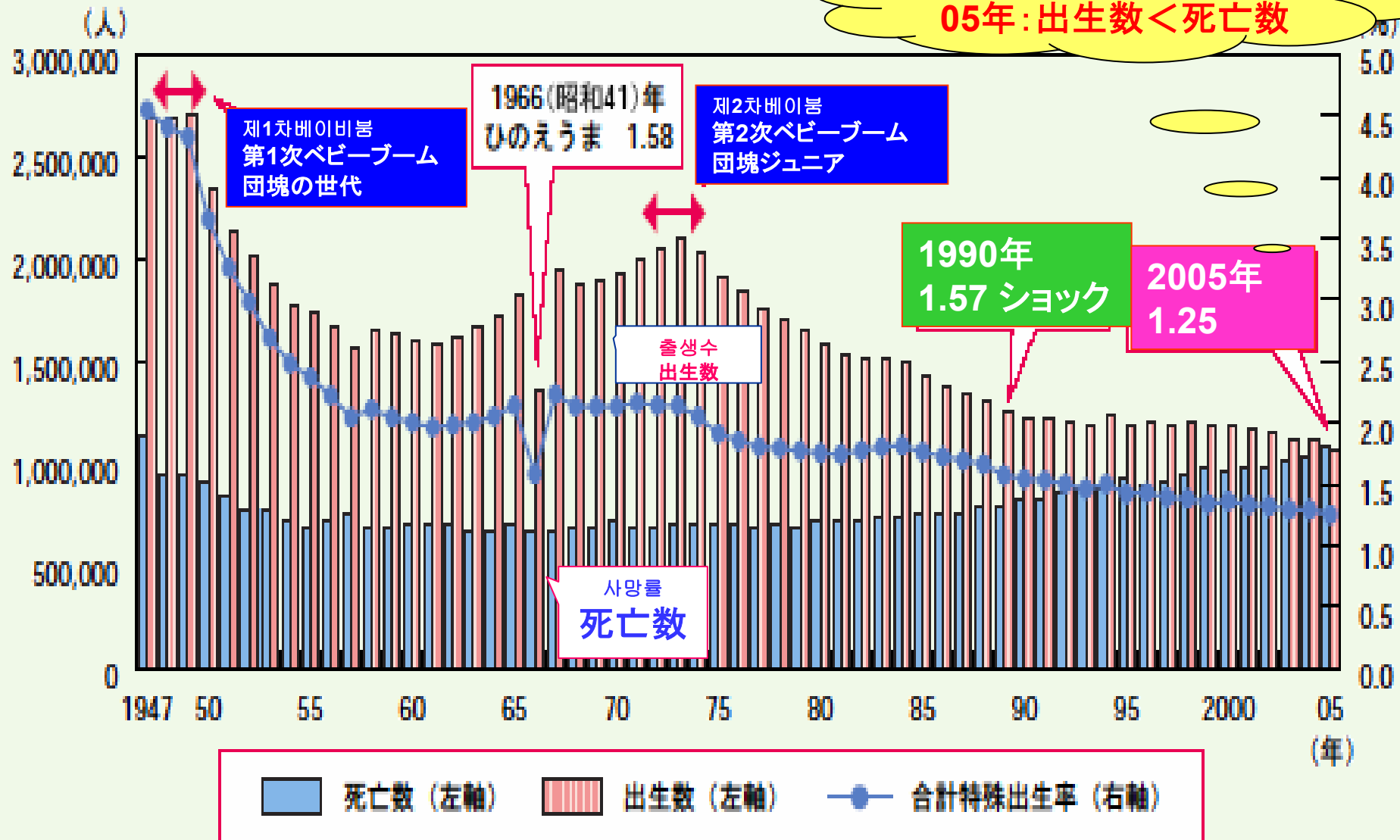
- ①異年齢の友を失う→学校のなかで人生の全てと教えられた最初の世代
 - ・身近な遊び空間に同年齢の友はいたが、入学とともに教室の友中心に
 - ・学年進行とともに部活と塾の友が加わる
 - ・学校の成績順位が人生のチャンスと条件付けると信じさせられた最初の日本人
- ②家庭の中は二人っ子、父母の愛情を平等に、
 - ・親（母）の愛情と学校の成績がリンクすると信じた家庭教育
 - ・シャッターと鍵で守られた（閉ざされた）家と部屋で育つ最初の日本人
 - ・異年齢に加えて身近な大人の男と女のモデルも失った最初の日本人
- ③近所の友と「いじめ＝逸脱批判学習」を開始したものの・・・
 - ・隣近所の同年齢の子どもと育ちあう機会を得た最後の日本人
 - ・いじめの原型を幼児期に経験するも、母親の愛と力で排除される
 - ・理不尽ないじめの経験は、友の供給源が教室の中に移るとともに始まる
 - ・学校と教室のなかのいじめは、生きる術の学習機会でなく逸脱行動に
 - ・それでも部活や塾などの教室の外で友を得ることが可能だが学校外は逸脱世界に

3) 少子世代

- ①家庭の中は二人っ子、父母の愛情を平等に、は変わらないが
 - ・共に育つ近所の同年齢の友をも失い、未熟な父と母の愛と力の支配下に
 - ・見知らぬ他者とコミュニケーションする術の学習なく学校に
- ②学校の教室で「いじめ＝差異隠し学習」開始→友は教室の中のみ、人生も
 - ・閉じた同質集団の力学から生じるいじめは、他者の排除、他者への優越の手段に
 - ・友は教室の中だけ→いじめ、いじめられ、守り、守られ→全て友との関係から
 - ・些細な差異が、いじめ、いじめられ、守り、守られる関係の分かれ目
 - ・いじめられる側にならない＝違いを隠すことを最優先する友人関係
 - ・問題の根は教師やメディアではなく、子どもの生きる場の一元化
- ③個性と能力の差異化こそ、学校の外の世界の評価の基準だが
 - ・間人主義の神話からの解放→生きる場としての学校の多元化→多様な師の参加

도표1 일본의출생수・사망률・합계특수출생률의추이

図1 最大の変化→人口減少社会に



資料: 厚生労働省大臣官房統計情報部「人口動態統計」

(注) 2005年は概数である。

図2 社会が変わり、子どもが変わる

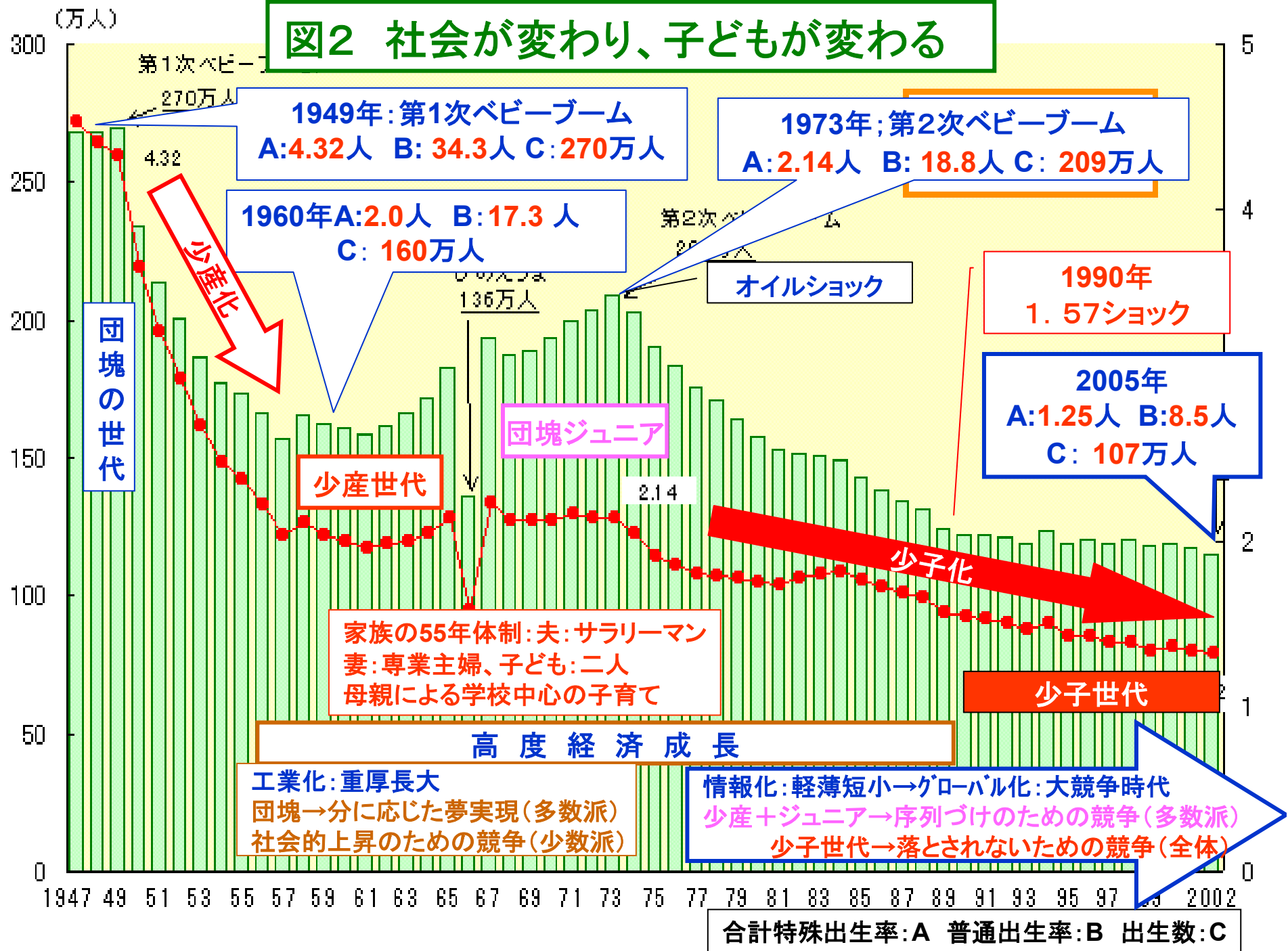
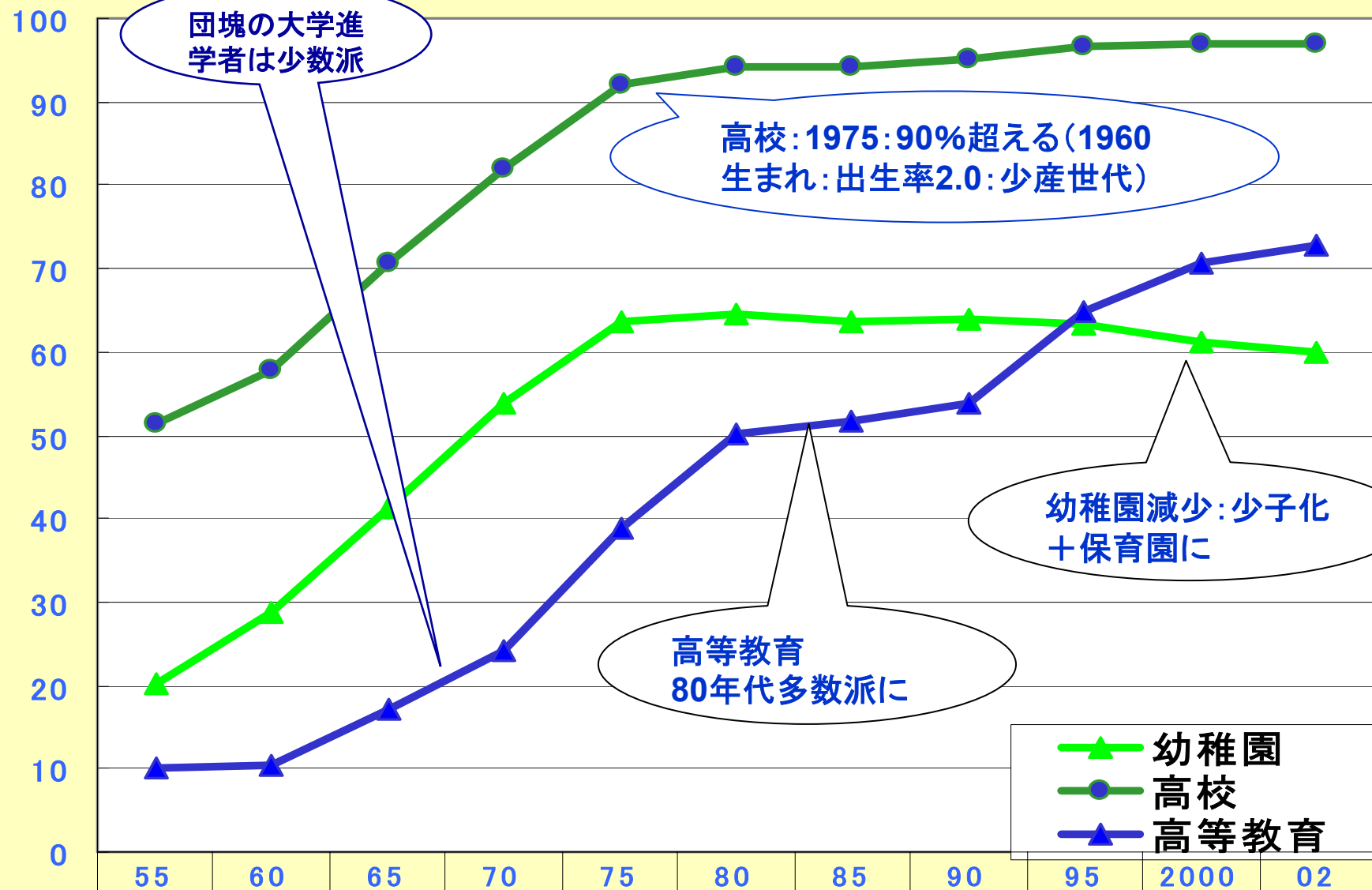


図3 進学率の推移



	55	60	65	70	75	80	85	90	95	2000	02
幼稚園	20.1	28.7	41.3	53.8	63.5	64.4	63.7	64.0	63.2	61.1	59.9
高校	51.5	57.7	70.7	82.1	91.9	94.2	94.1	95.1	96.7	97.0	97.0
高等教育	10.1	10.3	17.1	24.0	39.0	50.0	51.7	53.7	64.7	70.5	72.9

図4 高等教育進学率男女比較

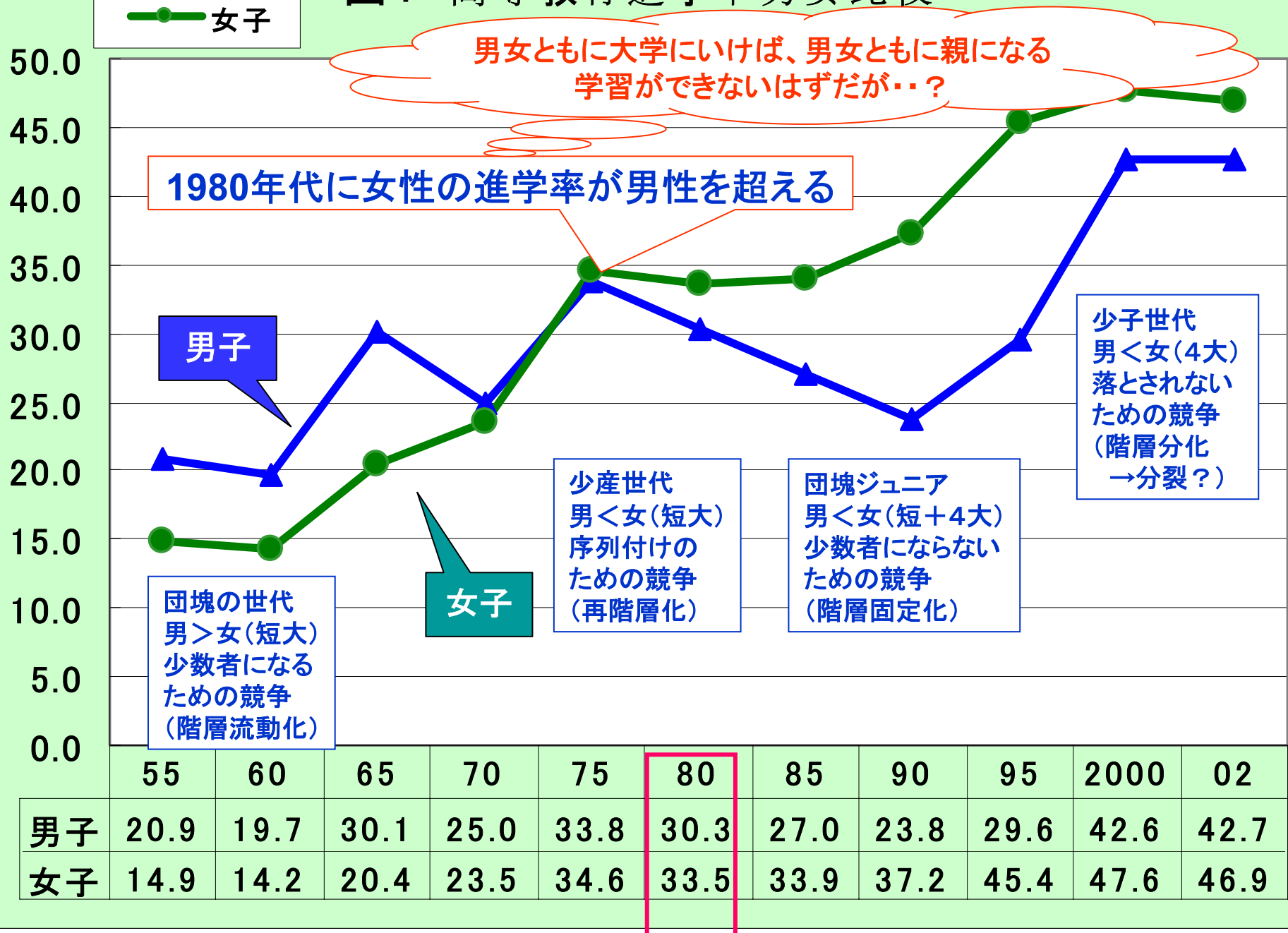


図5 男性未婚率の推移

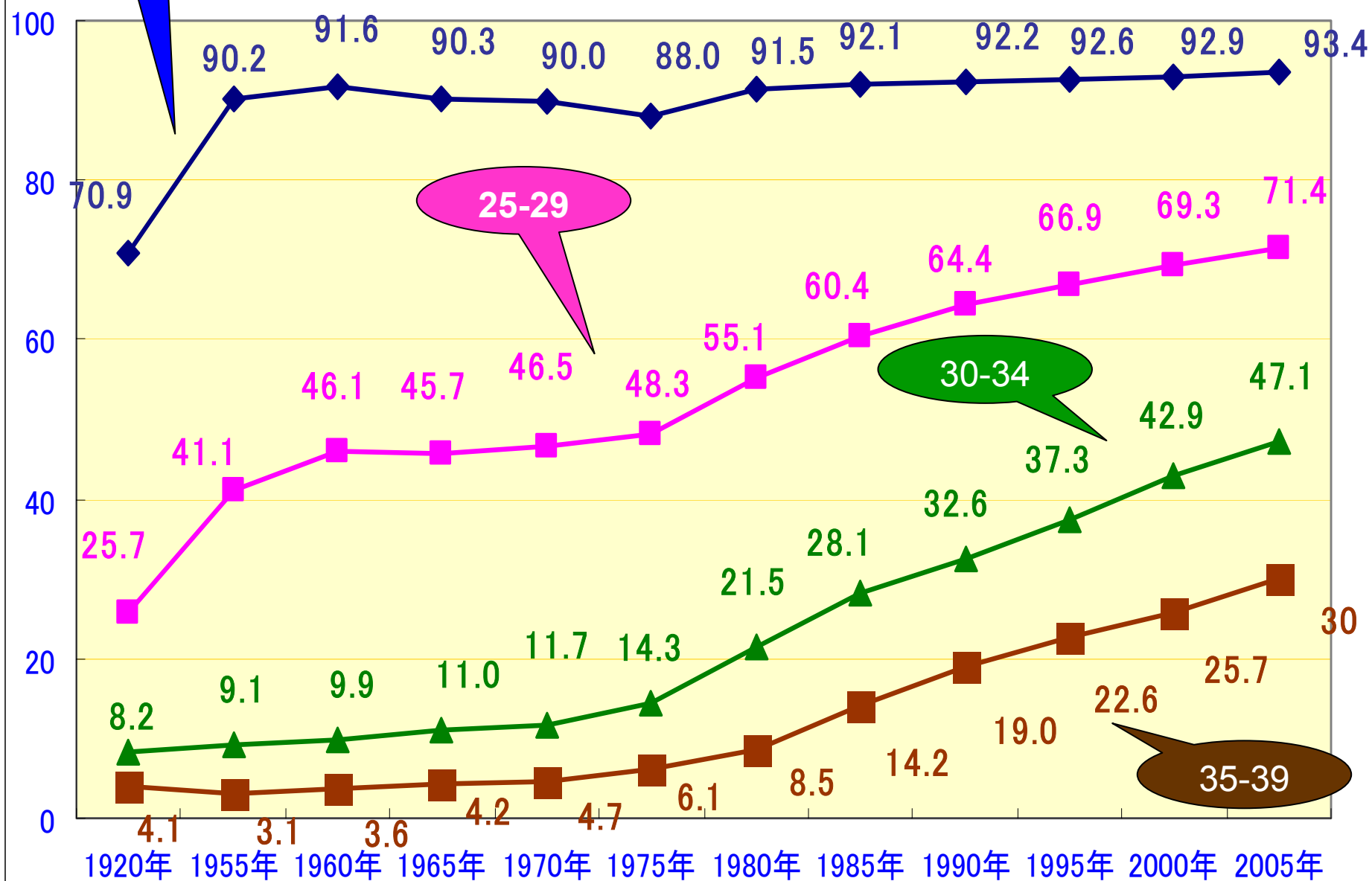


図6 女性未婚率の推移

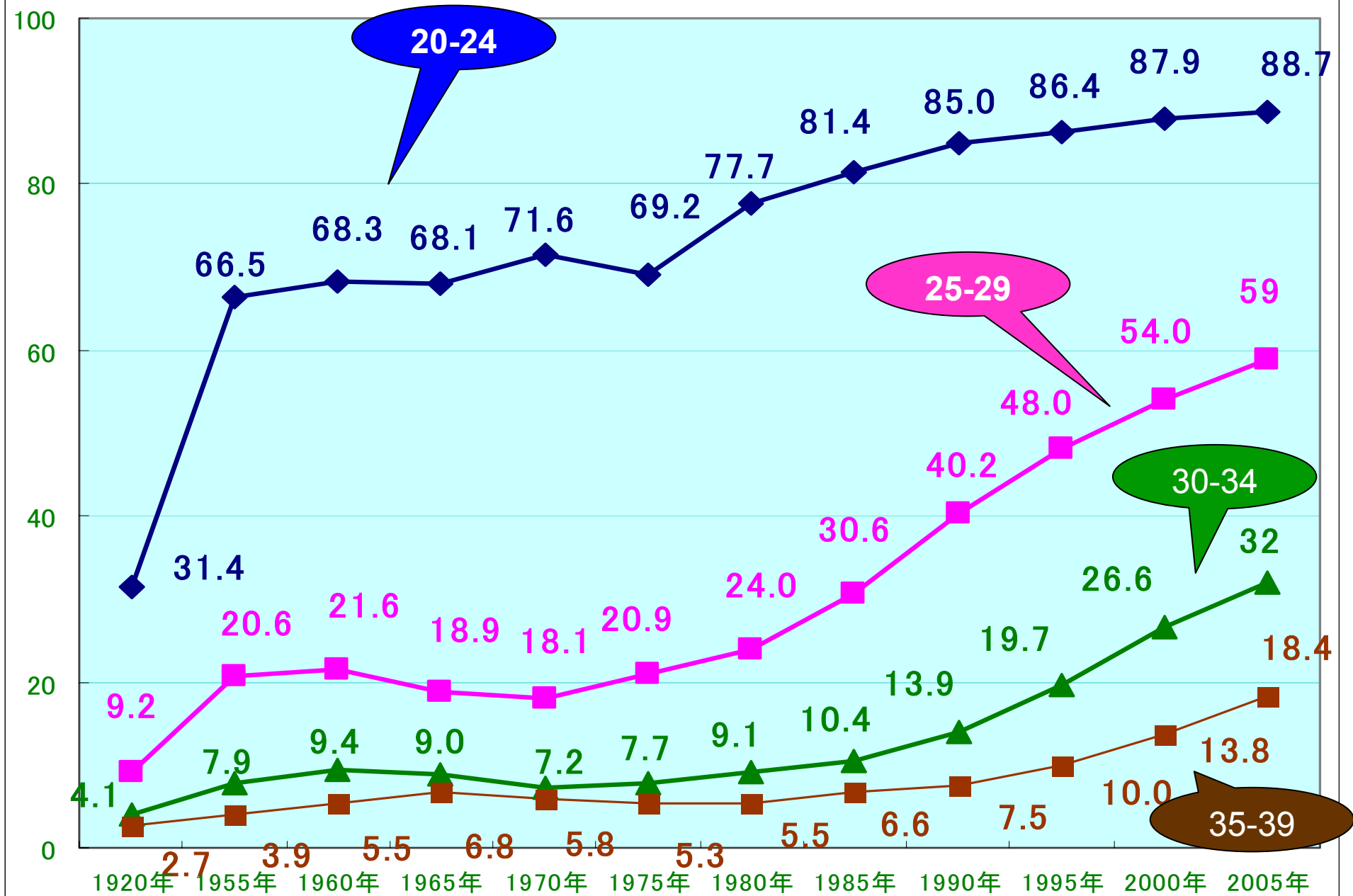


図7 男女別未婚率の推移：05年国勢調査

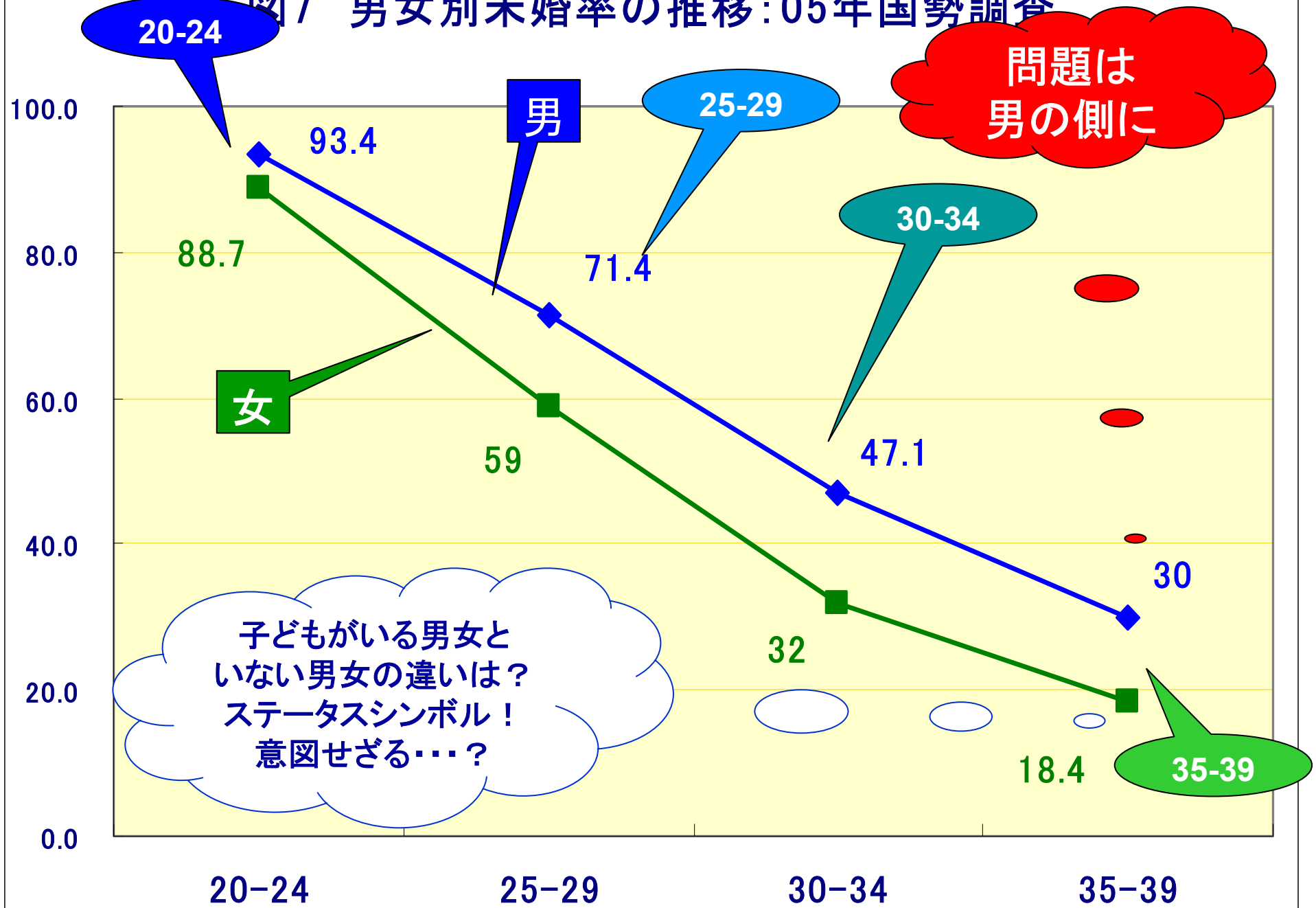


図8 普通出生率(人口千人対)

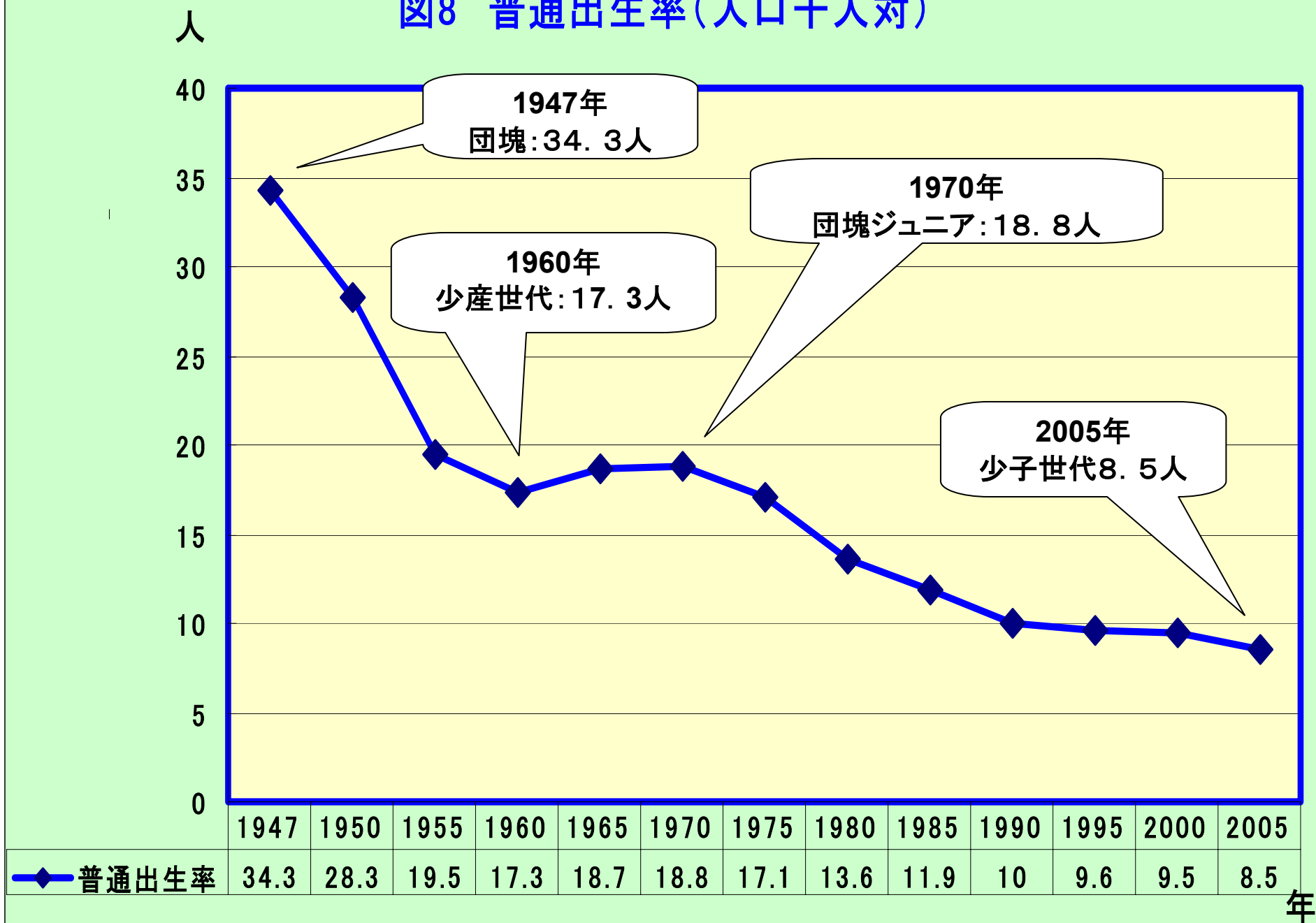


図9 児童有(児童数)無別にみた世帯数の構成割合の推移

子供のいる世帯は27%に、
家庭の中の子ども数は変わらない

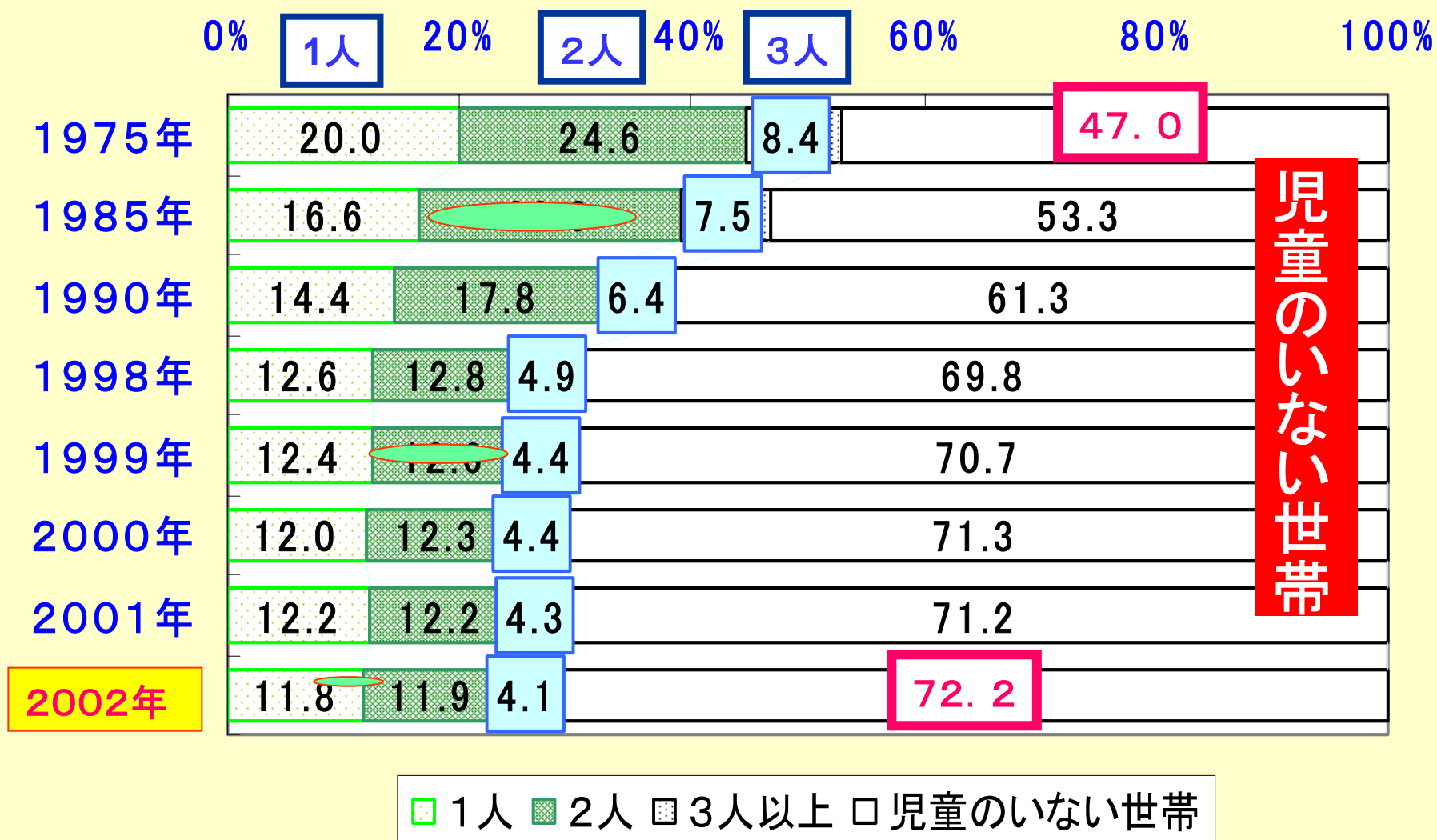


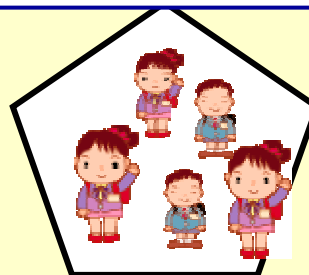
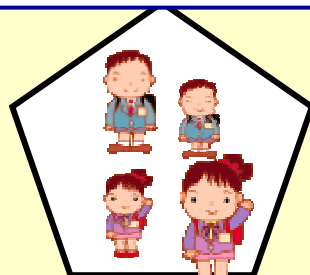
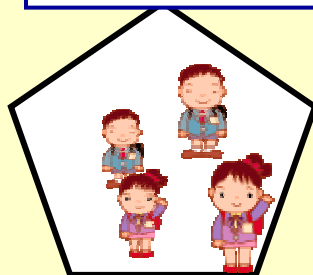
図10 子どもの変化といじめの変化

普通出生率

団塊の世代→モデルだらけ→夢は一人になりたい
(生まれたときから「いじめ＝弱点克服学習」→学校外が真の人生)

合計特殊出生率

34人

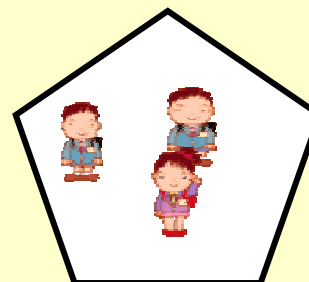
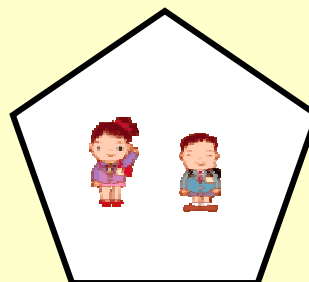
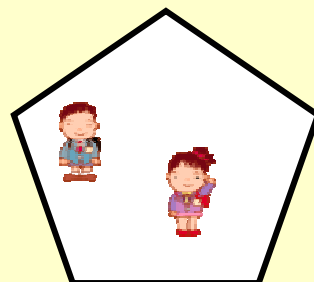
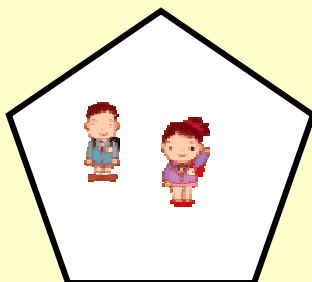


4.3人

身近な大人の男と女のモデルも失う

少産世代+団塊ジュニア→異年齢の友を失う
(近所の友と「いじめ＝逸脱批判学習」開始→教室外で友獲得可能だが学校外は逸脱世界)

18人

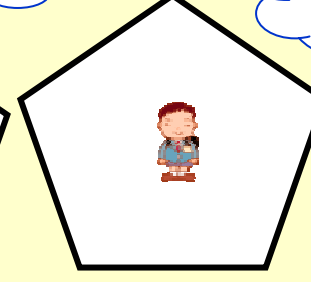
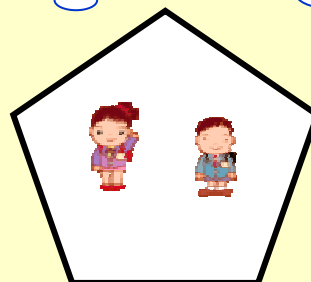
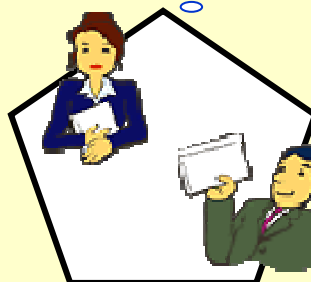
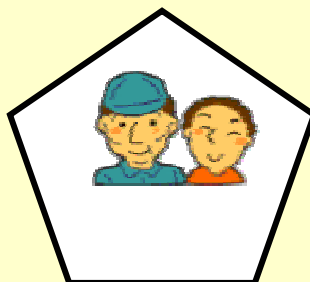


2.1人

少子世代→同年齢の友をも失い、教室の中しか友を見出せない
(学校の教室で「いじめ＝差異隠し学習」開始→友は教室の中のみ、人生も)

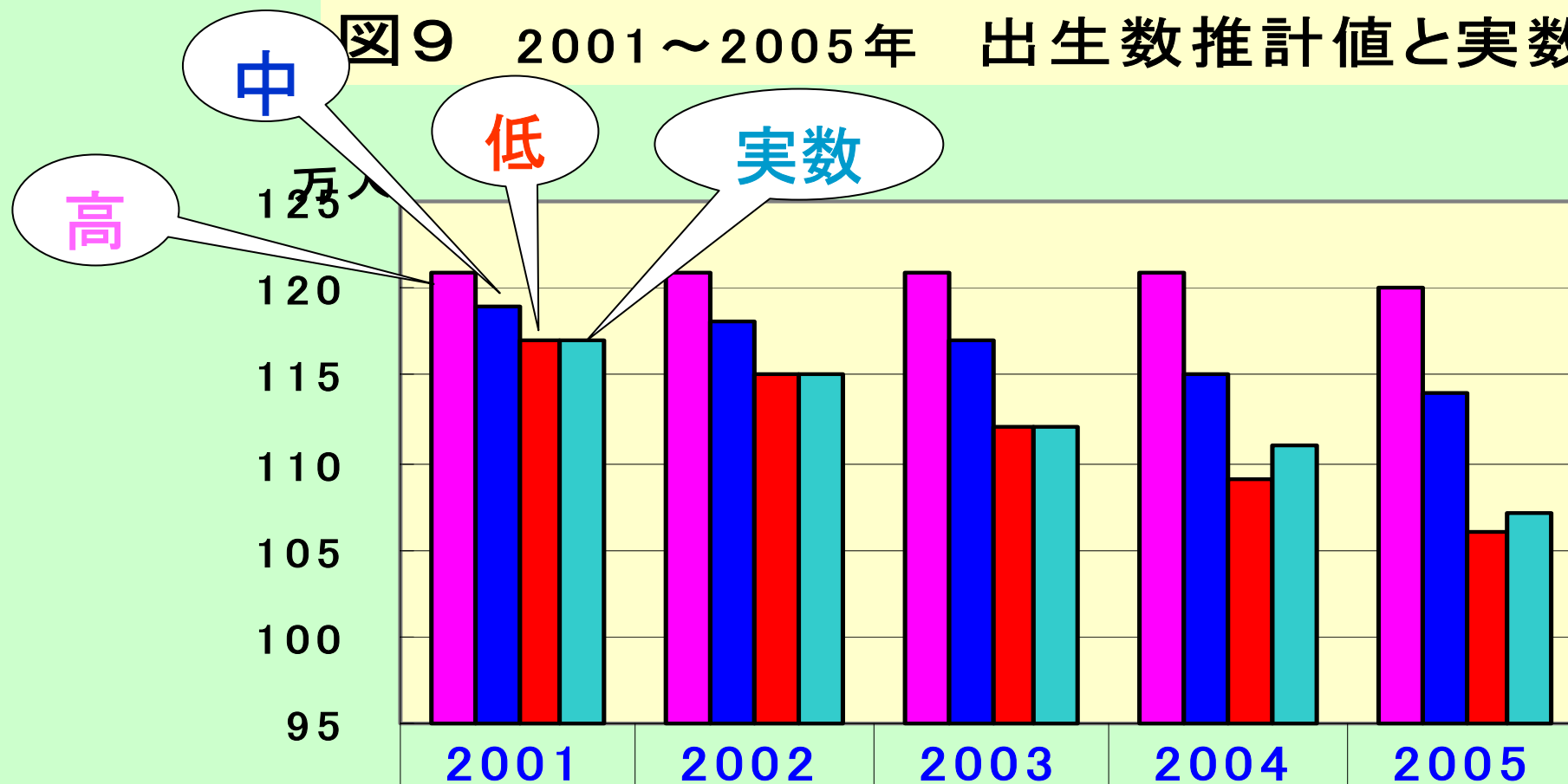
親も未経験で孤立

8.5人



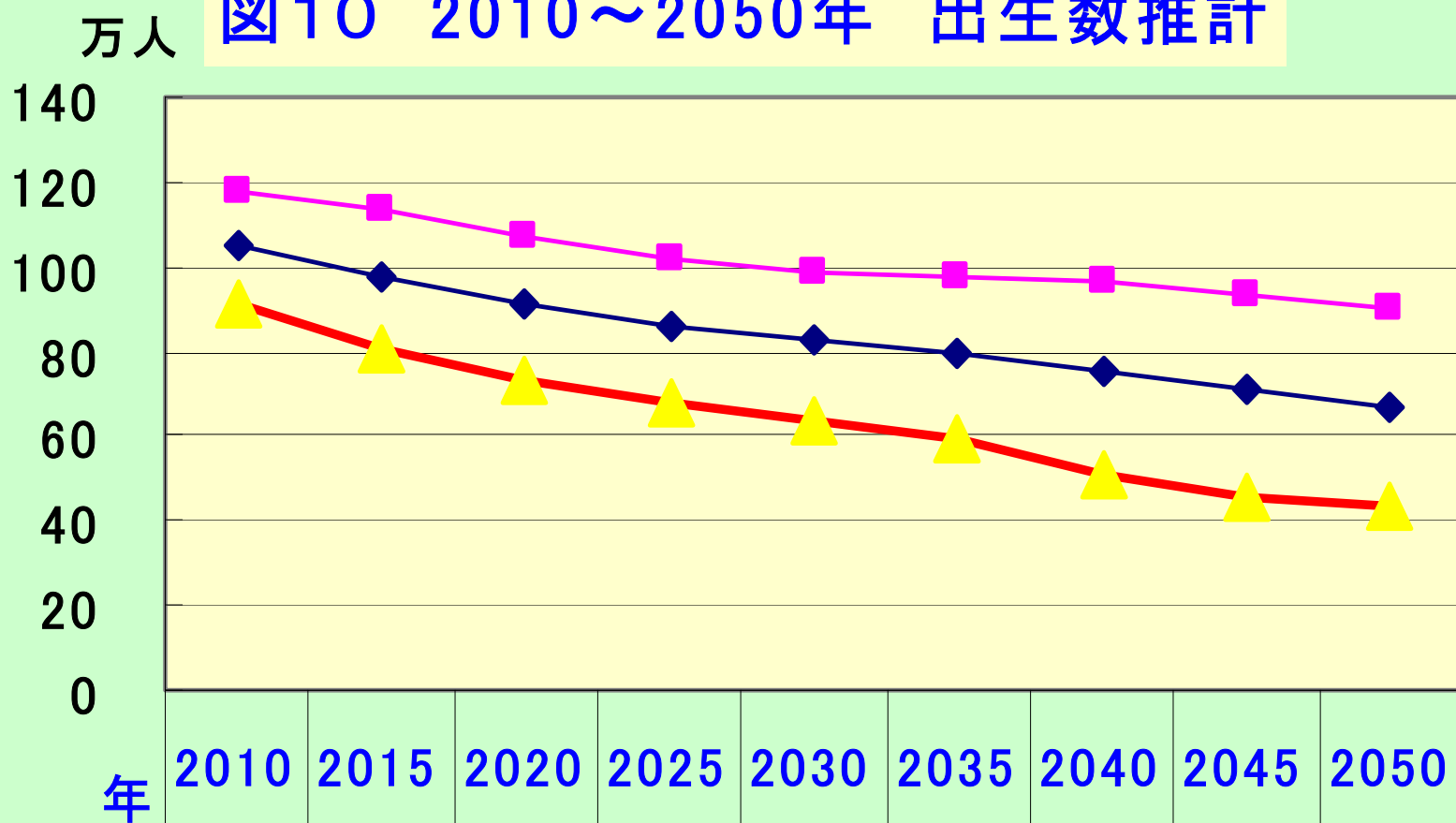
1.25人

図9 2001～2005年 出生数推計値と実数



■ 高位推計	121	121	121	121	120
■ 中位推計	119	118	117	115	114
■ 低位推計	117	115	112	109	106
■ 実数	117	115	112	111	107

図10 2010～2050年 出生数推計



◆ 中位	105	98	91	86	83	80	75	71	67
■ 高位	118	113	107	102	99	98	96	93	90
▲ 低位	91	81	73	68	64	59	51	46	43

図11 00年→25年 高齢世帯総数の推移
(増加率)

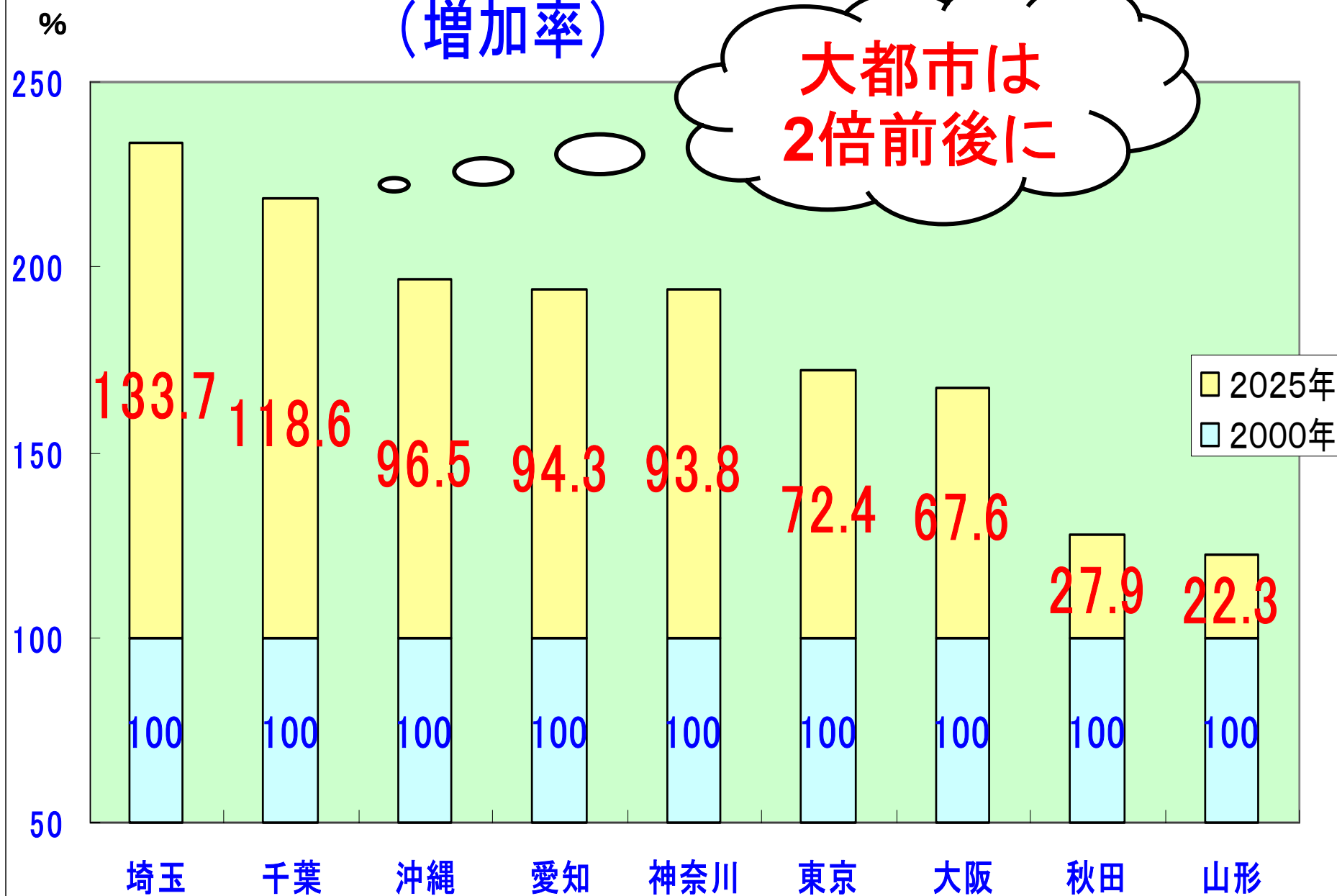


図12 00年→25年 高齢世帯総数の推移

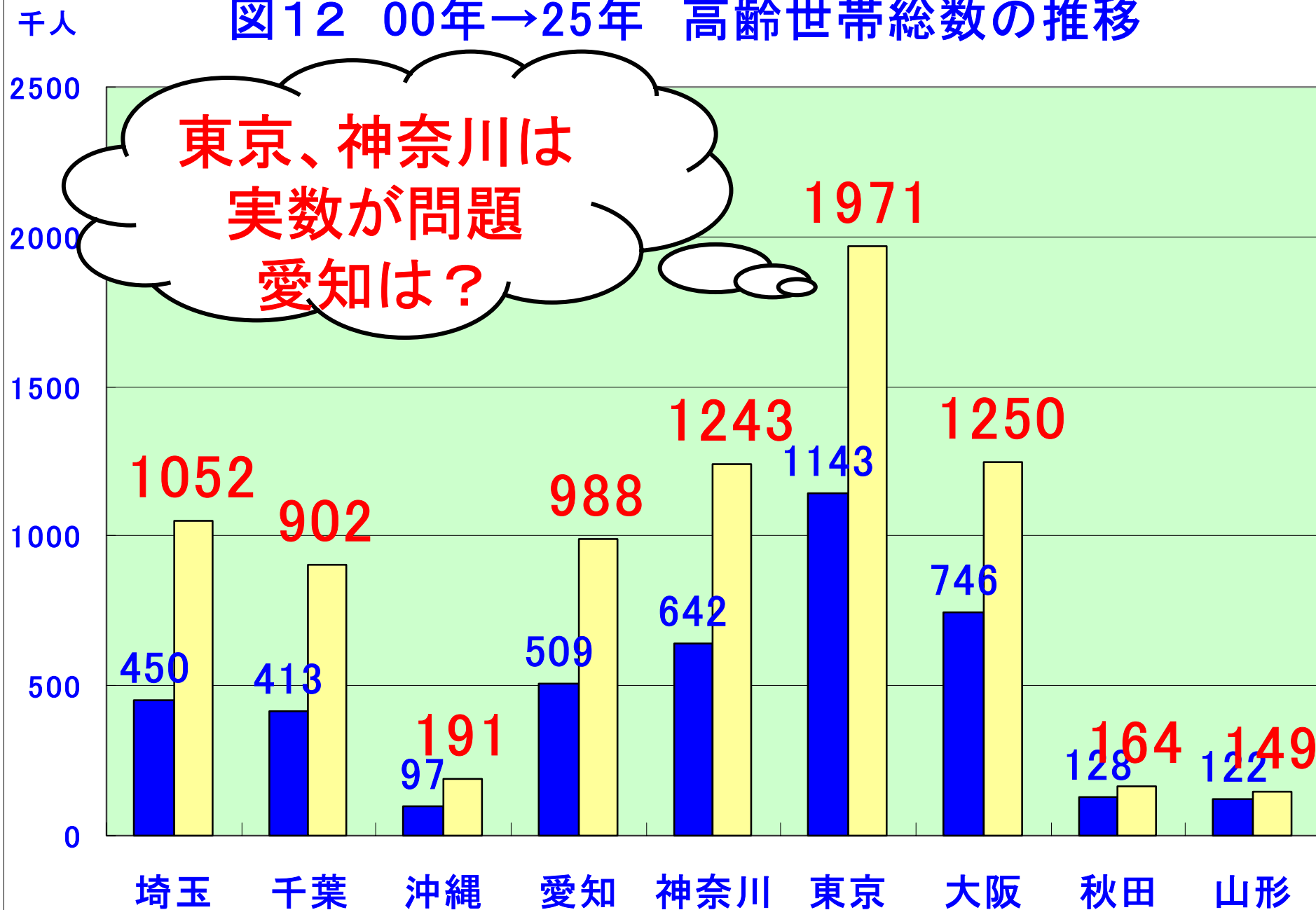


図13 00→25年 高齢単独世帯推計(増加率)

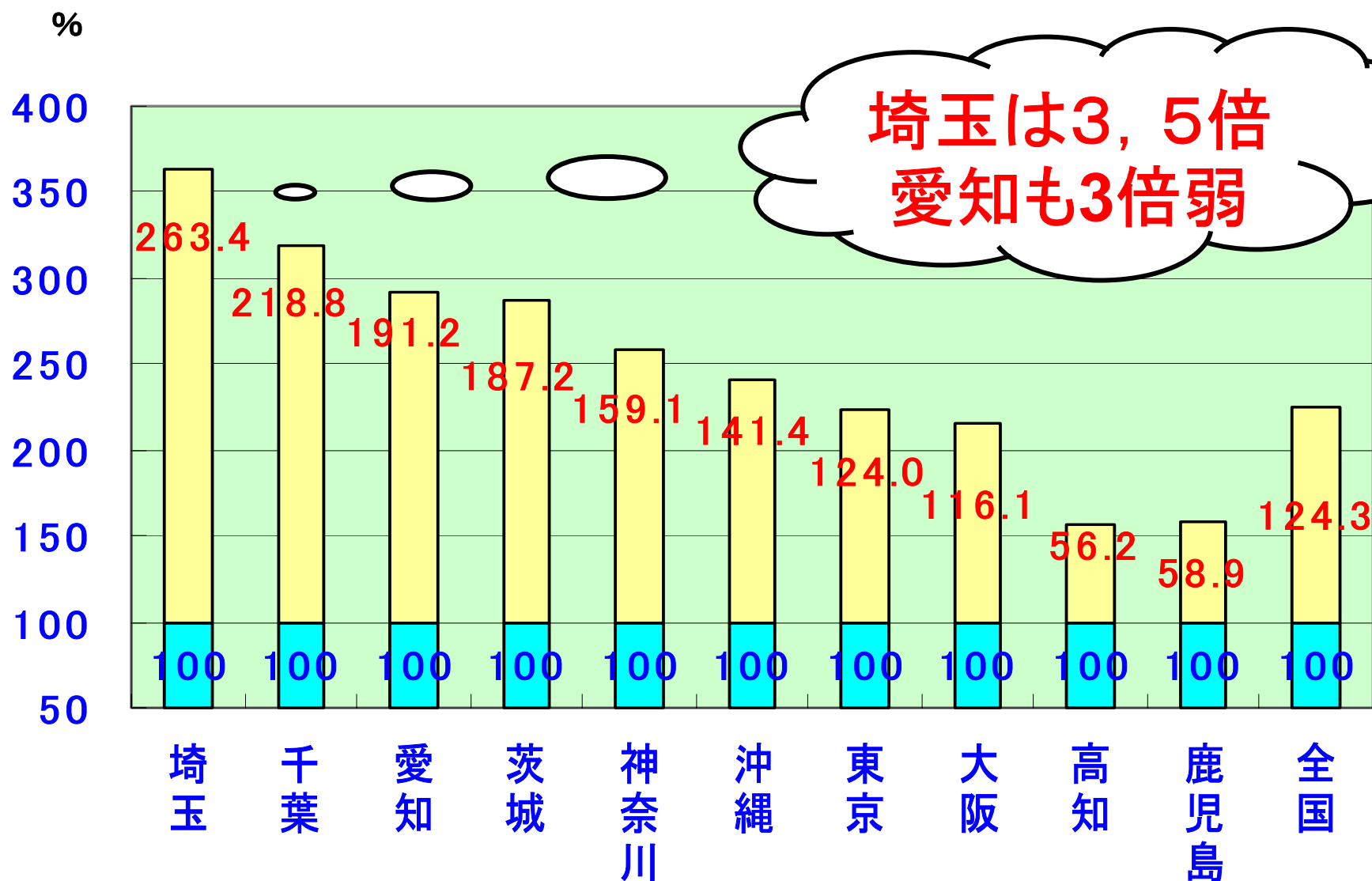


図14 00→25年 高齢単独世帯推計(全世帯中割合)

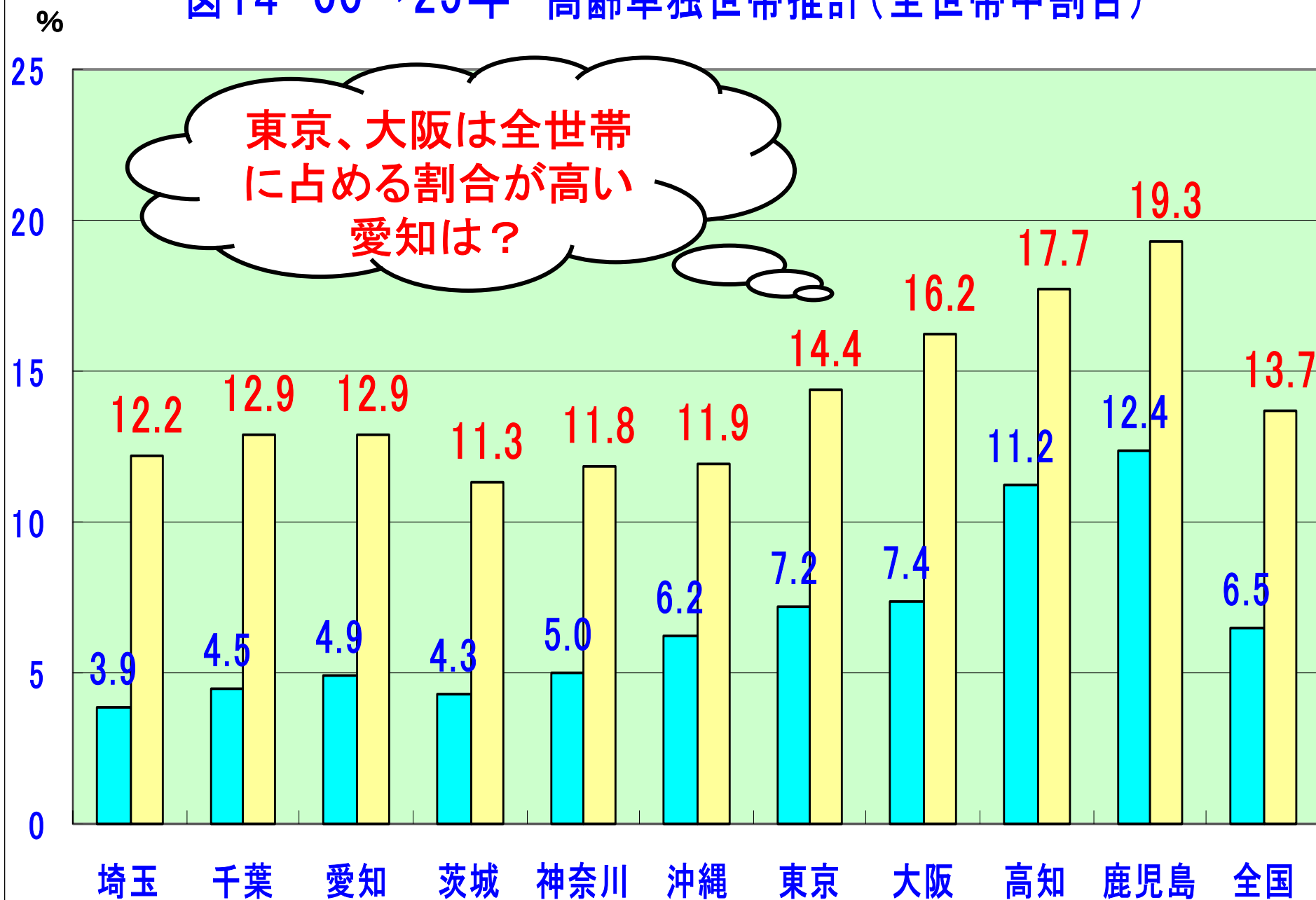


図15 00→25年 高齢単独世帯＋夫婦のみ世帯
(増加率)

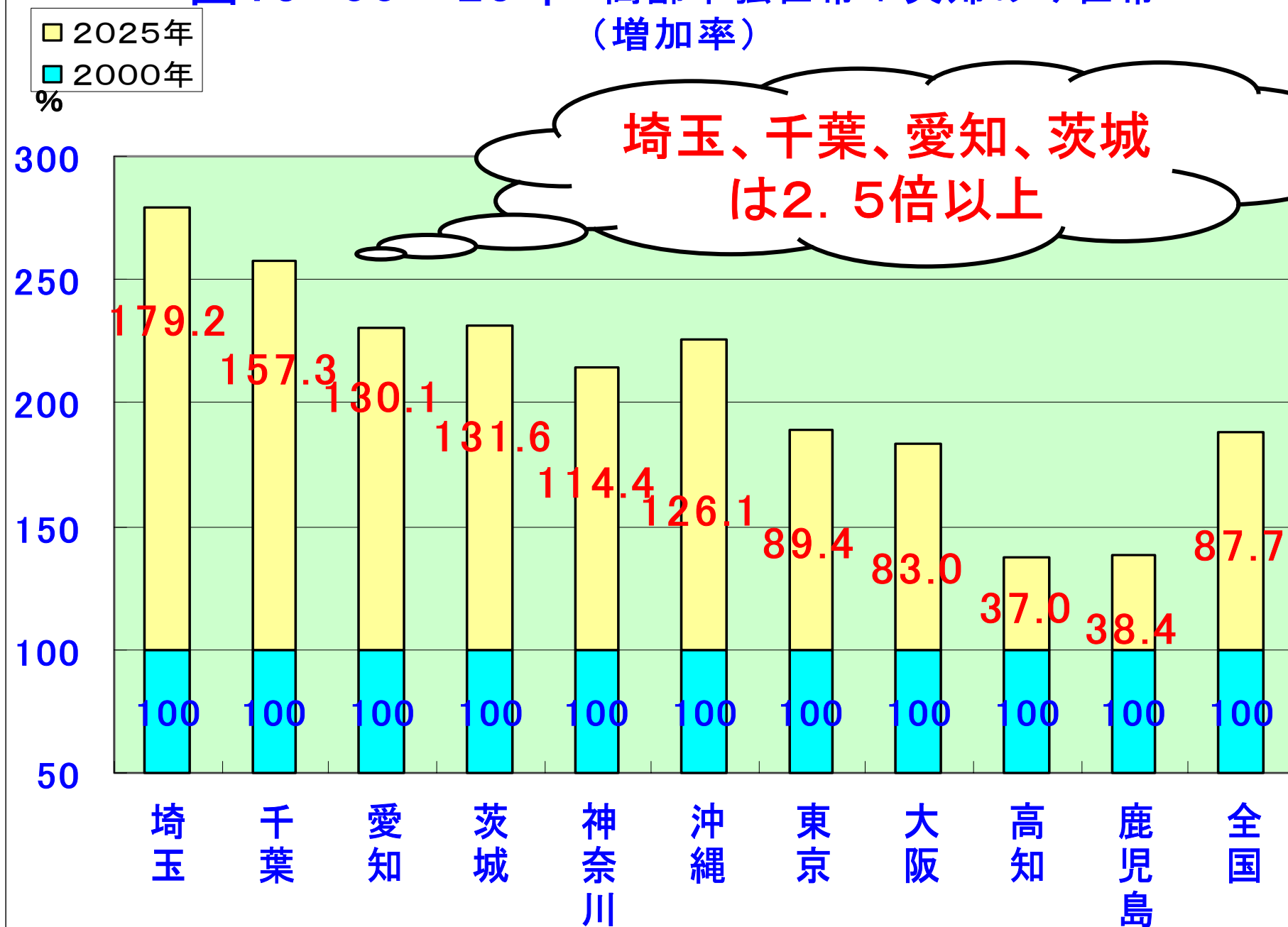


図16 00→25年 高齢単独＋夫婦のみ世帯(割合)

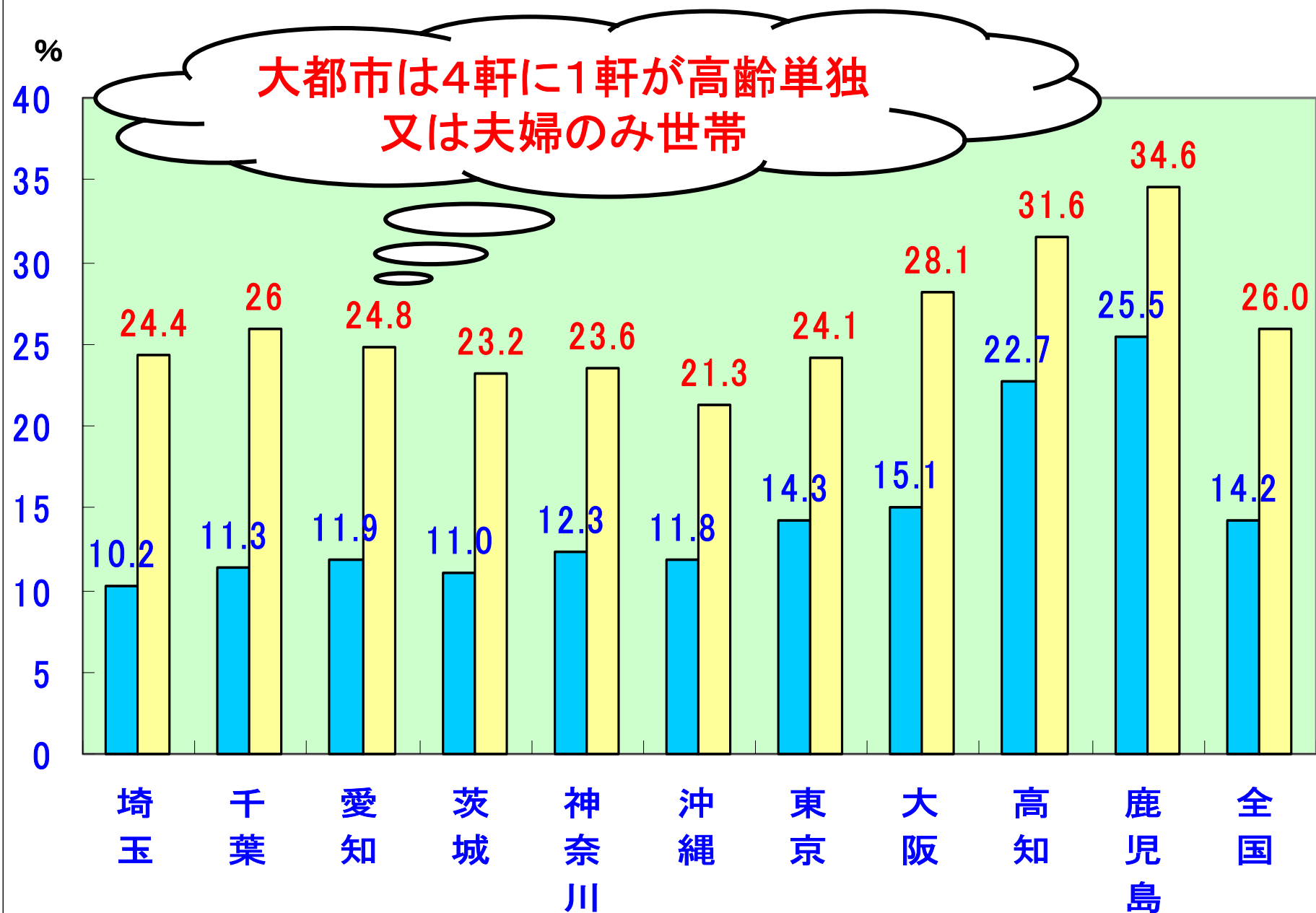


図17 沖縄の高い出生率・数の背景には

1. 女性の労働力率の高さ
7割近い女性が働き続ける社会

2. 保育所の多さ

- 認可と認可外をあわせれば
2歳児、3歳児、4歳児の7割前後
- 認可外保育所の保育料の低さ
平均25000円

図18 名護市:女性の年齢別労働力率

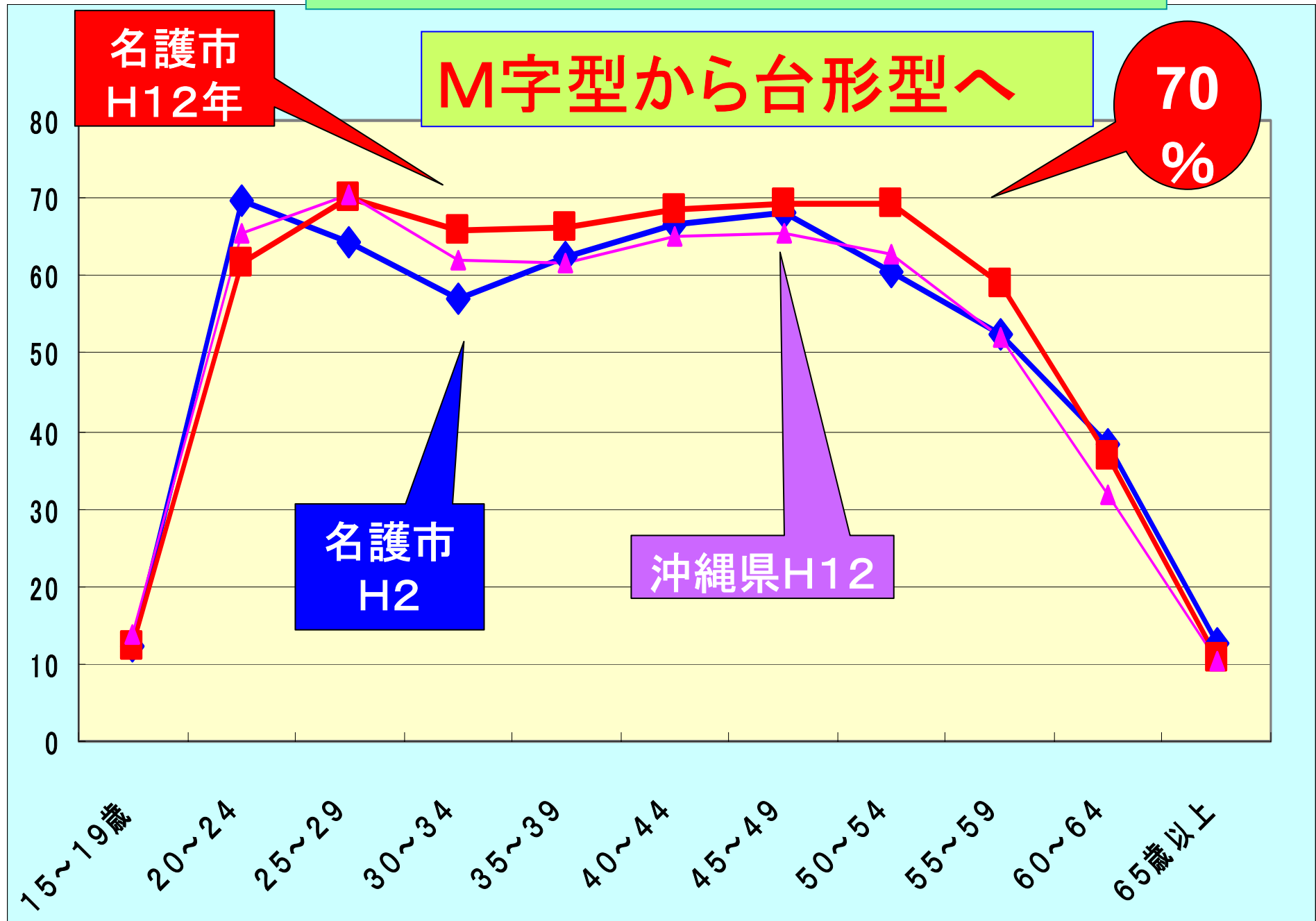
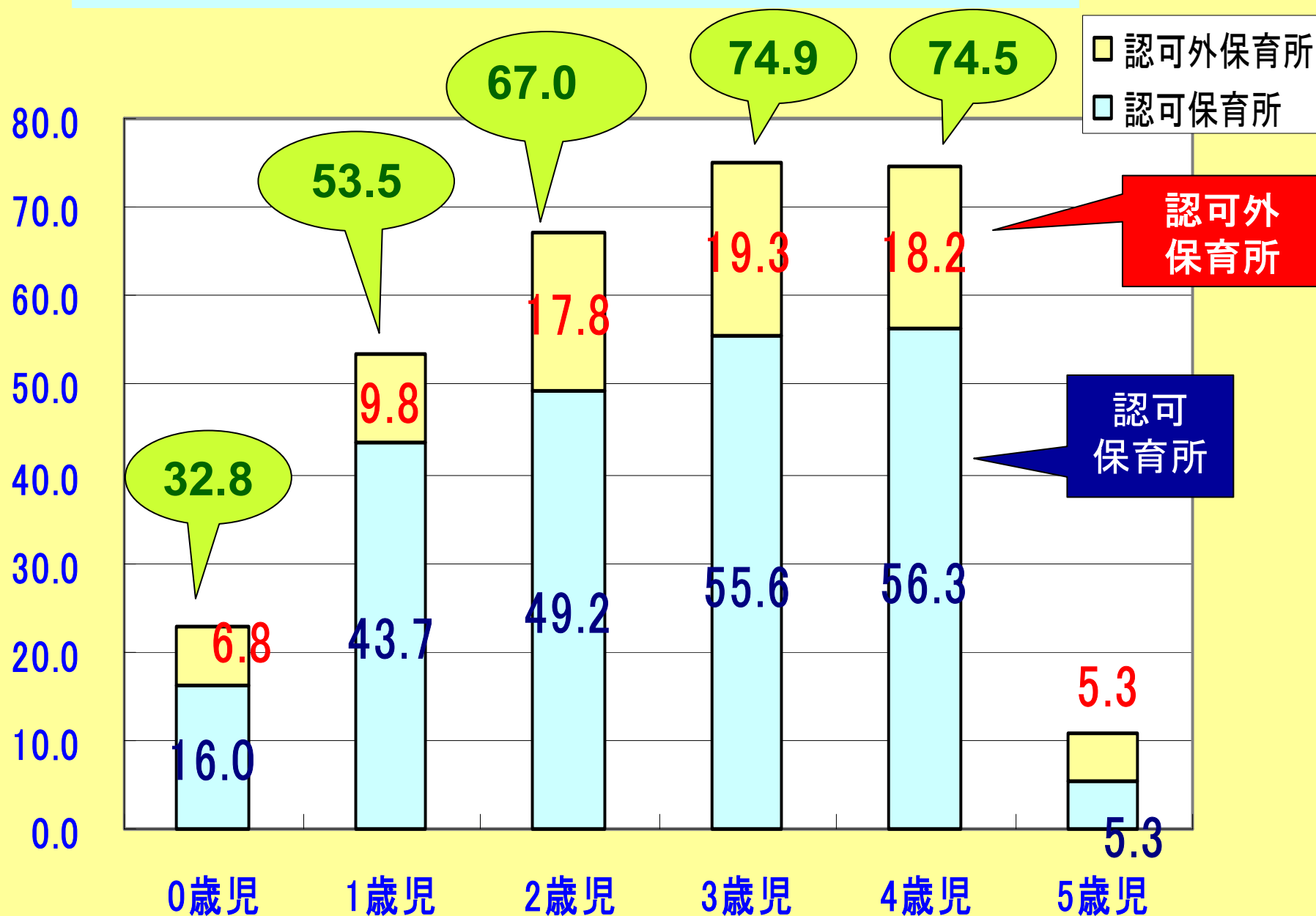
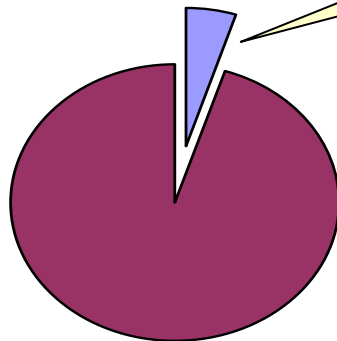


図19 名護市：就学前児童（認可＋認可外保育所利用率）

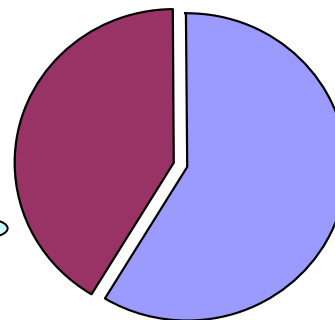


全国の保育園



全国の認可外保育園(5%)

沖縄県の保育園



沖縄県の認可外保育園(58%)

図20

沖縄の
認可外保育所の実態
は



参考資料

団塊の世代

この世代が生まれたあと、日本は韓国戦争を契機に、戦後の世界システムを枠付ける冷戦体制のなかで、講和条約とともに結ばれた日米安保条約のもと、米国の側に所属する国としての歩みを始める。その結果、一方で、平和憲法を盾に軍備ではなく経済成長を優先し、他方で冷戦体制の国内判としての55年体制のもとで、イデオロギーの対立が様々な次元で判断の尺度となる文化を形成することになる。この戦後日本の二つの特性、すなわち経済成長優先による豊かさ志向とイデオロギー優先による政治意識の高揚はともに団塊の世代を枠付けることになる。

特に、重厚長大型の高度成長の進行とともに小、中、高、大という学校歴を歩み、日本が豊かな社会に変化する過程に自己の成長過程を重ねることができる世代である。マンガ読者になりうる小学校の中高学年になったこの世代をターゲットに、少年サンデーと少年マガジンが59年に創刊されたことが代表するように、様々な商品が子ども文化の中に入りこむとともに、東京を発進源とする情報がリアルタイムで全国の子どもの社会認識を枠付けるようになる。その意味で、消費社会の洗礼を受けた最初の世代である。しかし、その商品を自分で買いそろえるほど小遣いは豊かではなく、テレビを見るために町をさまよった世代である。戦前に自己形成をした親のもとに生まれ育った多産世代の最後として、基本的な生活習慣や生活力においては、貧しさを基調とした伝統的な日本社会の文化を内在化した最後の世代ともいえる。したがって、子ども文化という意味では、貧しい農業社会における多産多死型の戦前の日本社会で培われたサブカルチャーをベースに、新たな消費文化が差し込むなかで、その量の多さもあって、独自のサブカルチャーを形成してきた世代といえよう。その意味で、韓国の「新世代」が「旧世代」を批判しつつも、その意識や行動様式は基本的に「旧世代」を受け継いだものであったのと同様に、「団塊の世代」もまた、その意識と行動様式の表層においては、次々と移り変わる商品を消費する文化をサブカルチャーとして形成しつつも、その基層部分は先立つ世代と同様の構造により枠付けられていた。

その意味で、上の世代から「滅私奉公」から「滅公奉私」に変化したと批判されたものの、六八年をピークとする大学紛争の当事者として、既存社会への批判というこの世代独自の「公的世界」への意識と行動（カウンターカルチャー）を思春期から青春期内在化する契機を持った。しかし、大衆化が進んだとはいえ、大学進学者は少数派（男20～25%、女10～15%）に止まり、その多くは闘争終結（卒業）とともに政治意識を霧散させさせた。その結果、学歴の高低を問わず、オイルショック後の産業構造と生活構造の改編過程に都市のニューファミリーとして自己（家族）の生活（私的世界）を優先する生活スタイルを選択し、「金ピカ時代」の80年代に子ども（団塊ジュニア）を育てるものの、その内実は家庭よりも仕事（「公」）を優先する父親と家事・育児（「私」）を専業にする母親という性別役割分業を定着させた世代となる。ただし、子どもとの関

係では、子育てや教育を私的世界の問題として位置づけたため、新たな時代に適合した公的世界を構築できえないままに子どもと分離する年代を向かえた世代といわざるをえない。そして、50代になった現在、新たな産業構造の変動と量の多さの圧力によるリストラの波を正面から受け、再び「公的世界」と対峙することにより、超高齢社会の当事者として、改めてその生きかたの改編を迫られている世代でもある。

少産世代

高度経済成長の成果が全国に拡大する東京オリンピック以後の社会において、都市的生活様式、専業主婦の母親とサラリーマンの父親、学校中心の生活、二人の子ども、という生活様式が定着する社会に生まれ育った最初の世代である。テレビとともに育ち、後に600万部という驚異的な発行部数を毎週発刊するようになる少年ジャンプの創刊とともに小学校時代を向かえ、テレビやマンガのキャラクターを世代の共通感覚として持つことを代表に、前節で指摘した消費文化を内在化させた最初の世代である。その意味で、韓国の「X世代」と同様の特性をもった世代といえる。「旧世代」との対比で特色づけられる「新世代」と異なり、理解不能な世代という意味で「新人類」と名付けられた理由である。

ただしこの世代は、先輩の「団塊の世代」（カウンターカルチャー）、後輩の「団塊ジュニア」（消費文化）という二つの巨大な人口コウホートには含まれた少数派として、独自のサブカルチャーを形成するパワーを持ちにくい世代である。むしろ、この世代で注目すべきことは、現在の少子化の直接原因となったことであろう。

高学歴、それも女性の高学歴化が飛躍的に進むとともに、卒業時は日本経済絶頂期の80年代前半。経済の拡大による労働力不足、情報化の進行と男女雇用均等法による後押しなど、女性の就業が一般化した世代である。その結果、女性が結婚、子育てという母親コースと仕事のみのキャリアコースという道を選択できる（せざるをえない？）ようになった最初の世代となる。しかし、学校の勉強中心に獲得した高学歴を踏み台に仕事中心に生きてきた女性にとって、家事・育児は未経験の世界。おまけに自分を育てた母親をみれば、専業主婦の未来に希望を託すには勇気がいる。その必然として晩婚化が進む。日本は結婚後でなければ子どもを産まない社会である以上、もともと少ない少産世代に加えて晩婚化の進行により、子どもを産む女性の数は減少し、出生数も減少する。

したがって、この特性は、「少子世代」の親として、改めて取り上げたい。

「団塊ジュニア」

「金ピカの時代」に小、中、高と進み、消費社会の拡大と自己形成の過程を重ねることができ一方で、進学を未だ家庭の事情で阻まれた親の夢を背負って、大学への進学を当然の如く受け入れざるをえなかった世代である。社会が消費社会化する過程で、子ども向けの商品が店頭に並びはじめた時代に、乏しき小遣いを工面しても手に入れることができなかった親と異なり、商品の消費を自己目的化する過程で自己形成をせざるを

えない社会的条件のもとにおかれながら、小・中・高と成長とともに強まる偏差値の圧力によって自己規制せざるをえない社会的文脈のもとで思春期を向かえた世代といえる。しかし、家庭のなかは二人でも、元気な母親による子育てネットワークや隣近所の同級生など、同じ年の仲間を得ることは困難ではなかった。ただし、異年齢の仲間を失った、そのため、同年令の気の合う仲間を中心とした人間関係が基準である以上、思春期はよりこえられても、一人の社会人として自立する上でのモデルを失った最初の世代でもある。

ただし、数の多さはそれ自体がパワーとなる。大人社会が用意する文化に抗して、自分たちの文化（サブカルチャー）をつくることができた最後？の世代といえよう。ただし、それもまた商品消費するという社会過程とセットでしか形成できないのもまた、消費文化に生まれ育ったこの世代の特性である。その代表が少年ジャンプ600万部という社会現象であろう。ジャンプは大人がつくった商品である。だが、それを600万という驚異的な発行部数にまで押し上げたのは「団塊ジュニア」のパワーであり、それ自体が学校というオモテ文化に対するカウンターカルチャー、すなわちサブカルチャーであるとして位置づけたい。ただし、少年ジャンプが商品であるという事実がもつこの世代の課題、そして消費文化をアイデンティティのなかに取り込まざるをえない子どもたちの課題については、次節にて考察したい。

少子世代

少子世代の始まりをどこにおくかにもよるが、とりあえず設定した1.57ショックの年をスタートにしても、未だ一歳。この世代独自のサブカルチャーの特性を明記できる年齢に達しているとはいえない。まして、近年の1.38あるいはそれ以下の子どもたちがどのような特性をもった世代なのかは不明といわざるをえない。ただし、その生まれ育つ社会的条件については、既に指摘した。

その一つは、韓国の「N世代」に対応する情報社会であろう。さらにより明確なのは共に育つ仲間を失った世代であること。そして、子どもの少なさは親の少なさでもある。加えて、女性として生まれた以上、当然のこととして（選択の余地なく）結婚したこれまでの母親と異なり、仕事にかかわって子育てを選択した母親の子どもである。同時に、自らが育つ過程で父や母となるための知識・技能を学習する機会がないままに、学校文化のなかで自己形成し、高学歴と就業が一般化した女性を母に持つ世代である。

生まれて初めて抱く乳児がわが子という親のもとで、おしめ、離乳食、子育てマニュアル、そして公園デビューの教則本まで、全て商品化された世界での子育てが一般化する。その一方、母親の孤立化が進行し、隣近所から隔離されたアパートの一室での母親のみの子育てが珍しくない。育児ストレスから育児ノイローゼ、さらには虐待というコースにだれもが陥る可能性があるなかでの子育てでもある。

90年代半ば以降、学級崩壊を代表に、この世代が小学校に入学する頃から新たな問

題点が指摘されるようになっている。しかし、それらは世代の問題というよりも、60年代に意図的に推進した少産化の結果、当然起こりうる課題について、社会の仕組みの側が準備してこなかった結果生じた現象ではないだろうか。次々に入学してくる多くの子どもたちに、できるだけ効率よく一定の知識を教授することを目的に制度化した学校教育をそのままにして、友人関係すらつくる機会を与えられなかった子どもたちを受け入れることができるとしたこと自体が問題といえまいか。

先に私見を提示したように、「少産世代」から「団塊ジュニア」に移行する過程にあった世代と、変化への対応を準備してこなかった制度や文化との軋轢によって、全国の中学校で校内暴力が頻発した。それと同様に、近年の中学生による旧来の常識では理解できない犯罪は、「団塊ジュニア」から「少子世代」への移行期故に生じたものなのか。それとも、仲間を失った「少子世代」に内在する問題の始まりなのか。あるいは、いじめや不登校を含め、「団塊ジュニア」からつながる消費文化の行き着く先にあるものなのか。

これらの課題を念頭におきつつ、次に「少産世代」に始まり「団塊ジュニア」の子ども時代に本格化する消費社会での子ども文化の特性を、その成立期に逆上って考察したい。さらに、「団塊ジュニア」から「少子世代」へと変化する過程にある現在の中高校生の意識特性に目を向けることから、今育ちつつある少子世代の課題を提示してみたい。

拙稿「消費社会の子どもたちのゆくえー『子ども文化の変容』」（『21世紀の教育と子どもたち 1 迷走する現代と子どもたち』門脇厚司他編著 東京書籍）より